

書評

山下清海 著

『横浜中華街 世界に誇るチャイナタウンの地理・歴史』

(筑摩書房、2021年12月)

飯塚 智 規

はじめに

日米修好通商条約による横浜の開港により、都市としての横浜の発展がスタートした。本来なら、神奈川が開港されるはずだった。しかし日本人と外国人とのトラブル発生の懸念から、両者の積極的交流がされないように、東海道から外れた埋立地を外国人居留地とした。つまり、この埋立地は長崎と同様に「出島」であった。「出島」に行くには、関門（関所）を通り、橋を渡らなければならなかった（その橋の一つである吉田橋には「吉田橋関門跡」の碑がある）。今日のJR 関内駅の駅名「関内」は「関所の内側」を意味し、馬車道や日本大通り、山下公園、山下埠頭、中華街、元町といった観光街があり、官公庁や企業も集まっている。ちなみに今日のJR 横浜駅は、1928年（昭和3年）に移設してできた3代目の横浜駅である（なお2代目の横浜駅は、現在の横浜市営地下鉄高島町駅付近にあった）。物資の輸送のため鉄道の敷設が必要となると、東海道から外れている初代横浜駅（現、JR 桜木町駅）は使い勝手が悪くなったのである。このように横浜駅の移設とともに、横浜という都市は拡大していったのであった。

こうした横浜の発展と密接に関係し、中国人コミュニティとして、観光地として発展したのが、横浜中華街である。近代以降の日中関係は、残念ながら、政治的に友好関係だった時期の方が短い。日中国交正常化が50周年を迎えたが、国交樹立以前も以後も、中国人コミュニティにとっては苦難の連続であった。戦前は敵国民として監視され、中華街は事実上の中国人収容所となった。戦後も冷戦構造の影響により、中華民国を支持するか中華人民共和国を支持するかでコミュニティが大きく揺れ続けた。日本経済の消長は横浜中華街で飲食業・仕立業・理髪業を営む人達に、周辺地域や行政と連携してまちづくりをしていくことを促すことになる。つまり世界情勢や日本経済の変化により、横浜中華街はコミュニティとしても観光地としても、大きく変化していったのである。

山下清海著『横浜中華街 世界に誇るチャイナタウンの地理・歴史』は、こうした横浜中華街の歴史を文献調査のみならず、著者自身が大学院生時代から行ってきたフィールドワークによる聞き取り調査の成果も踏まえて、今日までの横浜中華街の歴史や文化を明らかにしている。著者

の専門は人文地理学である。横浜中華街の地形にも着目して話が展開する。神戸や長崎、あるいは海外のチャイナタウンとの比較も興味深い。

本書の構成と概要

本書は序章と終章を除き10章構成となっている。序章では、横浜中華街の地形について説明しており、なぜ横浜中華街が湿地帯に形成されたのか問題提起をして本章が始まる。第1章から第4章までは、横浜開港から戦後初めまでの歴史である。外国人居留地が形成され欧米資本が進出すると、彼らは中国人（特に広東人）を買弁（中国人商人のこと）として随伴した。買弁の仲介により、日本人商人との間で漢字を用いた筆談で意思疎通が可能となる。またコックや使用人、船舶の荷役労働者としても中国人が重宝された。欧米人が山手に居留地を形成したのに対して、中国人は低湿地の場所に居住地を形成することになった。そこが後の中華街となる。時代が明治になり、外国人居留地が廃止され日本人との雑居が進んでいく。しかし、関東大震災や横浜大空襲により横浜は甚大な被害を受ける。戦後の闇市、外人バーとしての復興とその終焉までが第4章の内容となる。単に歴史的事実を羅列しているだけではなく、当時の華僑の社会・文化・ルーツ・職業・教育を交えて説明が展開されていく。

第5章から第8章までは、横浜中華街が今日までどのようにまちづくりに取り組んできたのかを取り上げている。ここでは中華街が観光地として、どのように発展していったのかが説明されるが、特徴的なのは、世界情勢や日本経済の影響によるマクロの視点から横浜中華街のまちづくりが語られていく点である。例えば、中華民国を支持するのか中華人民共和国を支持するのかという政治的対立による華僑社会の分裂と日本化の進展（生活様式の日本化や日本への帰化）、日中国交正常化による中華街ブームの到来と新華僑の進出、日本経済の停滞、みなとみらい線の開通と東横線等との相互直通運転の開始による観光客の増加である。主に外的要因により、横浜中華街が発展・多様化を進めていくことが、ダイナミックに描かれる。

第9章では、神戸や長崎の中華街の歴史や、池袋・川口のニューチャイナタウンについて触れ、第10章では、米のサンフランシスコや韓国の仁川の中華街を取り上げている。国内外の中華街と横浜の中華街を比較することで、あらためて横浜中華街が観光地として成功したことを特徴付けている。チャイナタウンは華僑の居住地、コミュニティ構成員へのサービス提供の性格が強いのが一般的である。中国人コミュニティとしての中華街が、観光地としての中華街へと舵を切り、今日の発展を遂げたことがあらためて理解できる。これを主導してきたのは、横浜中華街発展会というまちづくり組合である。終章では、この発展会の理事長への聞き取り調査から、今後の横浜中華街の発展に対する展望を述べている。横浜の財産として、横浜中華街の公共性を強く印象付けている。

本書の特徴と意義

人文地理学は、人間と環境・地域との関係を考察する学問であり、人間と環境の関係、または人間と空間の関係について、産業・文化・コミュニティ・交通・人口等の多様な視点で分析・考察を行う。横浜という場所・空間、また中華街が形成された環境と、そこで生活を営む中国人や日本人の関係を文化やコミュニティを中心に、横浜開港から今日までの歴史的流れをダイナミックに捉えて説明している点に本書の特徴と意義がある。さらには、上述のとおり、世界情勢や日本経済の影響によるマクロの視点から横浜中華街の発展について説明が展開されるので、読者は当時の横浜中華街の置かれた状況、中国人のコミュニティの分断と、まちづくりによって分断を乗り越える様子が分かる。

我々政策を研究する者にとっては、どうしても近視眼的にまちづくりを捉えがちになる。つまり、まちづくりに係わるステークホルダーの関係、あるいは政治・行政の政策プロセスにばかり気を取られる。産業・文化・コミュニティといったまちづくりの重要なポイントを押さえることは、もちろん理解している。しかしながら、空間・環境との関係、歴史的背景の理解、さらには世界情勢からの影響といった外的要因の影響まで俯瞰して、まちづくりを捉えることは、あまり無いのではないか（もしかしたら筆者だけかもしれないが）。まちの魅力が、過去から現在までどのようにつくられてきたのかを明らかにすることができるのは、都市計画やまちづくりの政策事象ではなく、まちを構成する人間の営みそのものであることが、この本から読み取ることができるだろう。

おわりに

私事であるが、筆者は震災復興を研究テーマの一つとしている。横浜は、関東大震災の被害が最も大きい場所であり、その後も空襲、駐留軍による接取のため、長らく復興が進まなかった。横浜中華街はどのような影響があったのかを知りたく文献を調べていたところ、本書に出会うことができた。あらためて中華街の魅力を知ることができただけでなく、これまで中華街が直面してきた問題について、理解が不足していたことを認識することができた。著者が若かりし頃から取り組んできた聞き取り調査のおかげで、どのような問題意識で中華街を発展させようと尽力してきたのか、まちの人達の思いを読み取ることができる。そしてまちの魅力の源泉が、そこで生活を営む人達にあることが、この本を通じて認識できるだろう。